

八重山諸島の考古学

(3) 食糧

1) 穀物類

新里村期の遺跡からは、少量ですが稲作や麦作の痕跡が見つっています。

ビロースク遺跡（石垣市教育委員会1983）の発掘調査では、Ⅱ層から炭化麦と炭化米が出土しています（図19）。報告書の所見によれば、イネは1粒のみで断定できませんが、麦作は盛行していたという可能性を指摘しています。なお、宇田津徹朗の報告（宇田津2005）では、ビロースク遺跡出土土器の胎土からイネのプラント・オパールが検出されています。分析したのが胴部資料であり、新里村期に属するビロースク式土器の破片であったという確証はありませんが、炭化米の出土と併せて考えると、新里村期は稲作の開始期として検討できるでしょう。また、ビロースク遺跡等で出土する貝包丁（クロチョウガイ製）は、穂摘具の可能性が指摘されています。



図19 ビロースク遺跡出土の炭化米と炭化麦

なお、八重山諸島の遺跡では、現在のところ先史時代の遺跡から農耕に関わる植物遺体は見つかりませんが、沖縄本島及び周辺離島では確認が報告された例があります。

9世紀～10世紀頃と考えられる那覇市的那崎原遺跡（那覇市教育委員会1996）では、鋤跡が残る畑跡遺構とともに、オオムギ、コムギ、イネ、アワなどが見つかり、生業基盤が農耕であったと考えられています（島1996、高宮1996、2005）。それ以前のことは、まだはっきりしませんが、木下尚子はこの事実を踏まえて、9～10世紀頃の沖縄本島では、すでに農耕が確実に行われ、それが大和の文化的影響下で実現したと指摘しています（木下2002）。

沖縄本島で農耕が開始されたと考えられる時期、八重山諸島ではまだ先史時代の無土器期でした。無土器期の終わりに北から入ってくる滑石製石鍋などとともに、農耕文化も入ってきたのでしょう。八重山諸島では土器を作り始めるだけでなく、農耕社会への移行も、この新里村期からと考えられます。

2) 動物遺体

穀物類以外の資料を見てみましょう。各遺跡の発掘調査により、人びとが豊富な海や山の幸を食していたことが分かっています。

特に、貝類の出土は多く、イノー（礁池）の中で採集できるものが多く出土しています。竹富島にある新里村東遺跡ではシレナシジミ、カイジ村跡遺跡ではセンニンガイやキバウミニナ、イボウミニナなど、河口干潟～マングローブ域に生息する貝も出土しています。竹富島は、大きな川はありません。このことから、人びとがほかの島も自由に行き来しながら食料の調達をしていたことが、貝の分析からも分かっています。



図20 リュウキュウイノシシ

ほかに魚の骨も多く見られ、ブダイ科はどの遺跡でも共通して出土しています。

リュウキュウイノシシ（図20）も多く食していたようで、イノシシが生息しない竹富島の新里村東遺跡やカイジ村跡遺跡でも出土しています。

また、新里村東遺跡ではウシの骨も出土しました。動物遺体は未整理の遺跡も多いですが、この頃からは、未攪乱の層からウシの出土が報告されるようになり、中森期では、その数も増えてきます。

オオコウモリやヘビの椎骨なども、少量ながら出土しています。これらの動物も、食べていたのでしょうか。

(4) その他動物遺体

新里村期より少し新しい時期になりますが、ビロースク遺跡のⅡ層上部からは埋葬されたイヌの骨(図21)が出土しています。後述しますが、骨を同定した金子浩昌は、種は日本犬ではなく古い時期のものではない、との見解を示しています。

イヌに関する文献を見てみると、1477年に八重山諸島に漂着した朝鮮人の記録があります(「朝鮮王朝実録」)。それによれば、所乃是麼(西表島とされる)では、島の人びとがイヌを飼っていることや、イヌを引き連れて槍を持ってイノシシを捕っていたことが記されています(池谷ほか2005)。また、近世文書の「慶来慶田城由来記」には、祖納堂の頃(15世紀頃)、漂着したオランダ船を助けた際に譲り受けた雄・雌各1匹ずつが最初のイヌであると記されています(石垣市役所1991)。

考古学的資料からは、古い物では先史時代の波照間島下田原貝塚でイヌの牙に穿孔した垂飾品が出土しています。牙のみが持ち込まれた可能性もありますが、いずれにしても、遺跡の発掘資料からすると、イヌの登場は「慶来慶田城由来記」に記されたより早くなる可能性があります。

新里村東遺跡ではほかに、イエネコやニワトリも出土していますが、新しいはずの新里村西遺跡から出土しないのに、新里村東遺跡で出土(新里村東遺跡の上層では、15・16世紀の陶磁器もあり、攪乱を受けています)することから、同定した金子は「東遺跡のほうがより古いと考えられているのにニワトリ、ネコなどのあるのは、これらが新しいものの混入ではないかという疑いをもたせる」と述べていて(金子1990)、古い時期の所産かどうかは不明です。

(5) 遺構

次に、住んでいた建物など、遺構について見てみましょう。

新里村期には、まだ屋敷囲いの石垣は作られていなかったようです。

住居跡と考えられるものは、ビロースク遺跡、新里村東遺跡、カイジ村跡遺跡で見つかっています。ビロースク遺跡が円形状平地住居(図22)であるのに対し、新里村東遺跡やカイジ村跡遺跡では方形の掘立柱建物であったと考えられています。集落の展開は、台地上であるビロースク遺跡と海岸に近い低地にある新里村東遺跡やカイジ村跡遺跡では、その立地にも差がありますが、それは、地形を反映したものだと考えられます。

また、新里村東遺跡で土留めの石積みを確認され、炉跡と考えられるものは、ビロースク遺跡、カイジ村跡遺跡で見つかっています。

墓は、ビロースク遺跡の大人と子どもそれぞれ1基のみが形態の分かる資料で、新里村東遺跡出土の人骨は5体ありますが、いずれも保存状態が悪く、報告書に遺構についての記載は見られません。ビロースク遺跡では、埋葬の頭位がバラバラであることから(図23)、民俗学的にも、宗教学的にも重要です。また、これらの人骨は、いずれも腹部に琉球石灰岩塊が置かれてあり、埋葬時の抱石と考えられています。ただし、この人骨については、金武正紀が後に、「ビロースク遺跡に石垣が登場した後の埋葬人骨で、十四、五世紀と考えられる」と述べ(金武2003)、中森期の所産である可



図 21 ビロースク遺跡出土のイヌの骨

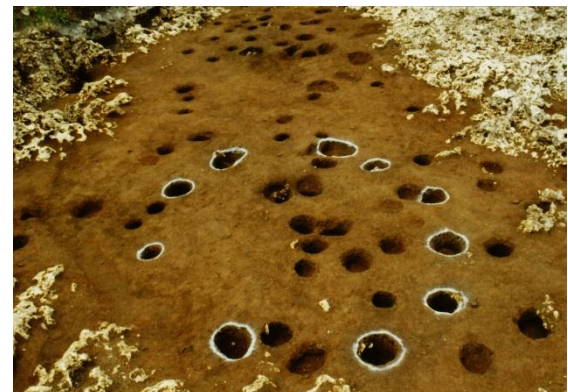


図 22 ビロースク遺跡円形円形状平地住居跡



図 23 ビロースク遺跡の人骨出土状況

能性を示唆しています。

7. 時代が動いた！ ～新里村期の意味～

新里村期は、現在までに遺跡の発見数は少ないですが、無土器期から新たに土器を作り始めただけではなく、北からやって来た人びとと交流し始めた痕跡が明確に見られます。この変革期の重要性から、新里村期が設定されたのです。

鉄製品の出土や、鍛冶の存在を示す韃の羽口の出土、玉類の出土等、先史時代（下田原期・無土器期）には見られなかった品物の出土は、人びとの生活を大きく変化させたことでしょうか。そして、沖縄諸島のグスク文化と共通の遺物が増えてくることから、搬入物を残すだけでなく、住居など、生活形態そのものにも影響したことが分かります。

また、炭化米や炭化麦、穂摘み具の可能性があるクロチョウガイ製貝包丁の出土から、農耕の開始期もこの新里村期であることが、考えられています。遺跡の発見数や発掘調査例は少ないながらも、新里村期は先史時代と歴史時代を繋ぐ、重要な時期なのです。

1992年に石垣市教育委員会が発掘し、無土器期と新里村期の遺跡である可能性が指摘されてきた嘉良嶽東貝塚は、近年、沖縄県立埋蔵文化財センターが新石垣空港建設計画に伴う発掘調査を実施したことによって、新里村期を含む遺跡であることが再確認されました（沖縄県立埋蔵文化財センター2007）。嘉良嶽東遺跡もカイジ浜貝塚同様に、無土器期と新里村期の包含層が確認された複合遺跡です。遺物が連続しているようすが分かることから、無土器期から新里村期への移行は断絶することなく、行われたのでしょうか。近年、宮古諸島でも、無土器期からそれに続く時期の包含層があることが、確認されつつあります（久貝・本村2013）。両諸島における無土器期から新里村期の遺跡のあり方が何を意味するのか、他地域との交流、自然環境の変化、自然災害等、いろいろな要因を考えながらの研究が望まれます。今後、新たな遺跡の発見・発掘によって、無土器から有土器へ、文明開化を経験した人びとの暮らしぶりが、より鮮明に見えてくることでしょう。

次はいよいよ、八重山諸島で急激に人口が増え、そして大きな集落が形成されていく、中森期の遺跡について紹介します。

<参考・引用文献一覧>

- 石垣市教育委員会 1983『ピロースク遺跡—沖縄県石垣市新川・ピロースク遺跡発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書第6号 石垣市教育委員会
- 石垣市役所 1991「慶来慶田城由来記」『石垣市史叢書』1（慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸締帳） 石垣市
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2005『朝鮮王朝実録琉球史料集成（原文篇・訳注篇）』 榕樹書林
- 宇田津徹朗 2005「石垣島における稲作の起源を追って—プラント・オパール分析法を用いた検討—」『石垣市史のひろば』第28号 石垣市総務部市史編集課
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007「嘉良嶽東貝塚」『沖縄県立埋蔵文化財センター企画展 発掘調査速報展2007』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌 1990「(16) 脊椎動物遺体」『新里村遺跡—竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第97集 沖縄県教育委員会
- 木下尚子 2002「貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』 熊本大学文学部木下研究室（2003年改訂版）
- 金武正紀 2003「第2部先島の先史・歴（原）史時代 第1章～第5章」『沖縄県史』各論編第2巻 考古 沖縄県教育委員会
- 久貝弥嗣・本村麻里衣 2013「2013年度友利元島遺跡発掘調査速報」『発掘調査が証す歴史津波の実態』沖縄防災環境学会シンポジウム in 青山学院大学 沖縄防災環境学会
- 島弘 1996「層序と遺構」「まとめ」『那崎原遺跡—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—』 那覇市文化財調査報告書第30集 那覇市教育委員会
- 高宮広土 1996「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—』 那覇市文化財調査報告書第30集 那覇市教育委員会
- 高宮広土 2005『島の先史学—パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代—』 ボーダーインク
- 那覇市教育委員会 1996『那崎原遺跡—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—』 那覇市文化財調査報告書第30集 那覇市教育委員会